

バルト神学の根本問題

寺 園 喜 基

目 次

はじめに

I 入信前後

II 「受け！」

III 滝沢克己先生との出会い

IV 滝沢先生における「インマヌエルの事実」

V 「バルトをバルトとして」

VI 若きバルトにおける神学の出発

VII バルトにおけるインマヌエル

VIII 日本におけるバルト受容

(1) 戦前におけるバルト受容の問題点

(2) 滝沢先生におけるバルト受容

(3) 神学の射程

むすび

は じ め に

私の研究の主たる関心はカール・バルト (Karl Barth, 1886~1968) にあります。バルトとは一体、何者なのでしょう。彼は宗教改革者ルター、カルヴァン以来の、20世紀最大のプロテスタント神学者であると言われます。スイスの片田舎で青年牧師として『ローマ書』を著して一躍有名になり、ドイツの大学に神学教授として招聘され、およそ1万ページにわたる広範な『教会教義学』を初め、多くの著書を著し、ヨーロッパのみならず世界の、そして日本のキリスト教会や神学、思想・哲学界に大きな影響を与えました。

同時に、ヒトラーの率いるナチズムに対抗する、いわゆる教会闘争の指導者として、また戦後は東西対立に和解を訴え、核兵器廃絶を呼び掛け、エキュメニカル運動に力を貸すなど、社会的、政治的にも大きな影響を与えました。彼の『全著作集』が今もなお刊行中であることを思えば、バルトの思想的・実践的影響はまだ継続中であると言わねばなりません。

私が何故バルト神学に惹かれるかと言えば、それは、バルトが神学の中心をキリスト論に置き、ここから神学を組み立てている点にあります。すなわち、キリスト教の教えの中心から語るという点です。中心から語るとは信仰の言葉を語るということですが、信仰の言葉とは、第1に、信ずる対象である神・キリストを語る言葉であり、第2に、このキリストを中心にして信ずる私および世界を語る言葉であります。このように、バルトの神学は信仰の学として、神と世界について知る喜びを与えてくれます。この点にバルト神学の魅力があります。

本日は、このバルト神学において根本的に問題になっている肝心な事は何か、について一緒に考えてみたいと思います。グラス (Guenter Grass, 1927~) は自分の自伝に『玉ねぎの皮をむきながら』(依岡隆児訳, 2008) というタイトルを付しましたが、私も玉ねぎの皮をむくように自分の歴史をめぐりつつ、テーマについて語りたいと思います。

I 入信前後

私がキリスト者になったのは高校2年生の時です。きっかけは授業の時でした。英語のテキスト講読の時間、ある単元で聖書の山上の説教が扱われました。その中の、「明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦労は、その日だけで十分である。」(マタイ6:36) という言葉について、英語の先生は、将来のことをくよくよ考えても仕方がない、今日を十分楽しめばよい、ケセラセラだよ、永遠とか永遠の命とかを考えなくてもよい、という解説をしました。すると、後ろの方から声があがりました。僕は永遠の命があると信じます、と言うのです。教室は一瞬、凍りつき

ました。先生はぎょっとしたような顔をして、話題を先に進めました。そう言ったのは私の友人でした。(鮫島勇次君といい、薬学の教授になりました。) 彼は中学2年生の時キリスト者になっていたのです。私はそのことを知りませんでしたので、教室でのこの出来事に驚き、ある種の感銘を受けました。ほどなくして、私を教会へ誘ってくれました。それは鹿児島バプテスト教会でしたが、そこで数ヵ月後にキリスト者になりました。

それ以来、受験中心の勉強や読書のかたわら、キリスト教関係の書物をも好んで読むようになりました。内村鑑三、ドストエフスキー、アルベルト・シュヴァイツァーなどが心に残っています。また授業でも、修道士(ブラザー)の先生が担当する哲学・思想史の時間が大変楽しみになりました。

志望大学を決めなくてはならない時、教会の牧師が神学校に行って牧師になるように勧めました。少しの迷いはありましたが、バプテスト教会の神学校であるこの西南学院大学の神学部(当時は文学部神学科)に進むことにしました。これを聞いた家族は大反対し、特に母は半分気狂いのようにになりましたが、どうすることもできませんでした。(その後、母は転居した茅ヶ崎で日本基督教会の洗礼を受け、父も洗礼までは至りませんでした。死ぬまで同じ教会に出席し、葬儀もその教会でしてもらいました。)

II 「受け！」

私が神学校に入学したのは1958(昭和33)年です。同級生に松倉治、安藤榮二先生など、先輩に石井光夫、池田巍義先生などがおり、また1学年下に葛生良一、梅田環、亀井良雄先生などがいます。

入学して間もなく、松倉先生に猪城博之先生(西南学院大学で哲学、ドイツ語を講じられ、後に九州大学で倫理学担当の教授)を紹介され、その後、2年生になってから松倉、安藤先生と一緒に3人、ご自宅でバルトの原書講読を毎週土曜日の午前中していただきました。『教会教義学』第1巻第1分冊がテキストで、卒業するまで続けました。これがバルト神学入門の第一歩であり、以後も先生の手ほどきによってバルト神学を内側から理解すること

を学びました。

また松倉先生には、アサ会牧師の河野博範先生も紹介されました。アサ会は昭和初期に田中聖暹牧師から始まったキリスト教の革新運動です。(直木賞作家、田中小実昌氏のご子息で、『ポロポロ』、『アメン父』で父親のことを書いています。) 滝沢克己先生はアサ会について、「従来の福音主義教会のきづなをさえ破って溢れ出た朝の光として、たしかに注目に値するものである。その外形の貧しさと素朴さのゆえに、ひとびとがそれを見すごしにすることのないように祈ってやまない。」(『仏教とキリスト教』法蔵館1964, 138頁)と述べて、高く評価しておられます。

河野博範先生は西南学院大学の英文科の教授をしながら、また福岡アサ会の牧師でもありました。夜の集会に座らせていただいたり、自主的に本を講読して下さったり、個人的にお話をする機会もありました。「先生、信仰について疑問があります」と問いますと、「問題があるということは答えがあるということじゃ」と答えられたり、「信仰がわかりません」と問いますと、「信仰がわかってたまるか。わからないままアーメンじゃ」と答えられたりしました。「イエス様一本」、「主の先だち」、「信仰を捨てる」などという言葉と共に、「受け」という言葉に強く打たれました。信仰という語は、信ずる人間の方に力点がかかり人間中心主義の傾向をおびている、信仰における本当の主体は神であり、人間はただ神に受動的にしか関われないのだから、「信仰」よりも「受け」と言うべきだ、と教えられました。神は、人間の宗教意識ではない、意識を超えて、意識を打ち破る事実であって、「受け」はこれを何とかして表現しようとする試みであり、これはカール・バルトの「神は神である」という『ローマ書』の命題に通じている、と思いました。

この「受け」の事態について、田中小実昌氏は『アメン父』の中でこう述べています。「ふつう、宗教は文化の所産だとおもわれている。でも、父は、宗教という言葉をつかうことはあっても人間文化の所産としての宗教のことではなかった。いや、宗教なんてことよりもアーメンだった。アーメン、イエス、イエスの十字架…。『宗教ではない、神の国だ!』というのは、カー

ル・バルトに強い影響をあたえたというドイツの牧師ブルームハルトの有名な言葉だが、ブルームハルト父子やバルト、うちの父などのはげしいイエスのこともわかってほしい。でも、宗教じゃない、アーメンだ、なんてとつぜん言われても、わかるひとは、ほんとにすくないだろうなあ。またよく自身ちゃんとわかってるわけでもない。しかし、そもそも、ちゃんとわかってることなどあるだろうか。それを、わかりやすく説明するなんて、できるものではない。説明ができ、納得できるものもある。でも、そんなものは、だいたいつまらない」(9頁)。

宗教ではなく神の国、宗教意識ではなく神の事実、これをこそ言語化することを心がけるといふ点で、アサ会とバルト神学は同じ方向を目指していると思います。

Ⅲ 滝沢克己先生との出会い

やはり2年生になった時、山路基先生が在外研究でドイツへ留学されたのを受けて、九州大学で哲学・倫理学の教授であった滝沢克己先生が非常勤講師として来校されました。滝沢先生は西田哲学から強い影響を受け、またその西田幾多郎の勧めでドイツ・ボン大学のカール・バルトの下に留学し、そして西田哲学とバルト神学とを切り結ぶ一点で先生独自の思想を形成したのであります。

滝沢先生は学部生のための講義と専攻科生の原書講読を受け持たれて、講義は井上良雄氏によって翻訳、出版されたばかりだったバルトの『和解論』をテキストにし、原書講読はその原書をテキストにして行われました。先生はバルトを用いつつ、ご自身の神学的理解・キリスト論を展開されました。私はその両方ともに出席させていただきました。これが滝沢先生との最初の出会いです。それ以後、神学生の期間、また卒業して先生の下で大学院生として学び、ボン大学へ留学するまでの間、合わせて約9年間、滝沢先生を聞き、理解することに努め、また先生のご指導で他の神学者や哲学者を読みました。

Ⅳ 滝沢先生における「インマヌエルの事実」

先生から学んだことは、人間存在の根源的な規定についてです。これを先生は、「神われらと共に」と言い、聖書の言葉を使って「インマヌエル」とも言われます。これは、次のように展開されます。

神は、人間がいかなる者であれ、業績や人柄に関係なく、その人間と共にいてくださいます。この「神われらと共に」という「インマヌエルの事実」は、人がそう思うとか思わないとかに関係なく、事実そうだからそうだという以外ないような、人間存在の存在論的規定、根源的規定なのです。この事実を信仰が作り出したのではなく、むしろ事実そうだからそうだ、というのが信仰です。そうでないと言ってこれを否定しても、この事実は無くなるものではありません。ですから、無神論者はまったく別の方向からこの事実に光を当てているのです。すなわち、フォイエルバッハやカール・マルクスが宗教を批判して、宗教は人間の意識の投影に過ぎないと言うのは、意識の投影に過ぎない限りでの宗教に対しては正当な批判なのです。しかし、真の事実は意識の彼方にあるのであります。

この事実、「インマヌエル・神われらと共に」とは、神の行為であり、神の創造です。そして、この「神われらと共に」には構成要素として3点ある、と滝沢先生は述べます。第1点は、不可逆性です。この「共に」においては神が先です。先ず神がいて、次に人間がいる。神が先に人間と共にいることによって、それに応じて、人間は神と共にいるのです。第2点は、不可分性です。神が先だからといって、人間なしの神がいるわけではありません。それは抽象的な神であって、実際の神ではありません。そのようにまた、この神から分離された人間も存在しません。この事実を知らない人間はいます。だからと言って、この事実が無くなるわけではありません。第3点は、不可同性です。人間は、神と共にいることを知ることによって、神ではないということ、また神のようになろうとする必要もなく、人間であることで十分である、ということを知ります。神と人間は別であって、この「別のもの」が共にあるのです。

このように人間は不可逆、不可分、不可同の仕方と神と共に存在する、これが滝沢先生の言うインマヌエルの事実です。先生はこのような人間存在の根源的な在り方を、第1義のインマヌエルとも呼びます。

すべての人間はこの普遍的なインマヌエルの事実を認識し、これに従って生きるようにと、この事実そのものによって求められています。しかし人間はこの事実気付かず、それとして認識しません。また知っていても、これに従って生きようとせず、実際的に従って生きていません。これが人間の罪だと、言われます。ところが、このインマヌエルの事実を十全的に認識し、生き、またこの事実を証した人がいるのであり、それが人間イエスなのだ、とされます。その意味で人間イエスはインマヌエルの目に見える徴なのです。インマヌエルのこの徴、証しという次元を滝沢先生は第2義のインマヌエルと呼びます。この第2義のインマヌエルの次元における完全性という点にイエスの無罪性があるのであり、ここで彼の人格における神と人間の統一性が語られます。イエス以外の他の人間は、このイエスからインマヌエルの事実を教えられて、自分の足下にあるこの事実が目覚めねばなりません。その限り、人間イエスは模範であり、教師であります。だがしかし、イエスは本性において、神ではありません。彼は人間であり、証人であり、徴なのです。人間イエスのみならず、すべての人間はインマヌエルの徴なのです。ただし、イエス以外の人間は不完全で不十分な徴なのです。その意味で、すべての人間は人間イエスから絶えず教えてもらわなくてはなりません。

これらのことをイエス・キリストに即して述べるなら、彼が誕生して初めてインマヌエルの事実が成立した、とは滝沢先生は考えません。むしろ、インマヌエルの徴が成立したことを意味します。地上の人間イエスは言葉と行いによって、インマヌエルの事実を伝えたのであり、イエスの生涯はインマヌエルの徴の生涯でありました。

さらに滝沢先生によるなら、インマヌエルの徴は単に人間イエスやキリスト教徒のみではありません。釈迦や仏教徒など、古今東西の宗教者においても認めることができる、と主張します。インマヌエルの事実はすべての人間存在の根源的規定であり、普遍的事実であって、人間イエスは歴史の内部で

それを証する徴の一例にすぎません。ここにおいて、キリスト教絶対主義は否定され、宗教間対話の道が拓かれます。イエスによらなくてもインマヌエルの事実は存在するのであり、また聖書以外にも、キリスト教会の壁の外にもインマヌエルの徴は見出されることができる、というのであります。

以上、滝沢先生の神学的主張の要点を述べました。先生はどのような講演や講義においても、インマヌエルの事実、第1義のインマヌエルについて先ず言及しました。特に60年代から70年代にかけて全国の大学で学生運動が盛んだった頃、学生たちや大学当局に本当の問題の所在は何所にあるのかを、このインマヌエル論から説き起こし、あるべき態度を示したのでした。

V 「バルトをバルトとして」

博士課程3年の時、滝沢先生の勧めによって私は(1967年に)ボン大学に留学しました。ボン大学はかつて先生がバルトに直に学んだ所です。1933年にヒトラーが政権を取って間もなく、大学の学長はドイツ式敬礼(「ハイル・ヒトラー!」)をもって講義を始めるように通達を出したのですが、バルトはこれを無視して、讃美歌を歌って講義を始めました。また、文部大臣はヒトラーへの忠誠を誓う誓約書を国家公務員に求めたのに対して、バルトはこれも拒否しました。直接的にはこれが原因で彼は大学を罷免され、ドイツ追放となりました。滝沢先生は直接バルトに学んだ最初の日本人であり、またこれら一連の出来事を目の当たりにした唯一の日本人でした。このボンでバルトは告白教会の反ナチズム運動、いわゆる教会闘争を指導したのです。

私が学んだころも、ボン大学にはまだバルトの影響が強く残っていました。バルトの弟子であるクレック(Walter Kreck)、ガイヤー(Hans-Georg Geyer)の両先生が組織神学の教授で、また両先生の下で博士論文を書いたばかりのクラッパート(Bertold Klappert)が助手をしていました。講義やゼミナールでは、「バルト神学入門」、「福音と律法」などバルトに関連したテーマが論じられ、また両先生の共同開催のオーバー・ゼミではバルトの『教会教義学』の各巻が順々に取り上げられました。クラッパートにはプロゼミでバル

トの講読をしてもらいました。お二人の教授はもう亡くなりましたが、クラブパートとは今も交流が続いています。

ボンに来て3年くらい経った頃、この先生たちが、神学部には数人の日本人留学生のために特別に何回か研究会を、クレック先生のご自宅で開いてくださいました。ある時、私はバルトのキリスト論について発表しました。それは博士論文の概要となるはずでした。ところが発表が終わると、先生たちが「どうも変だ!」、「それはバルトではない!」と口々に言われるのです。それは衝撃でした。私は驚きかつ落胆しました。先生方が、私のバルト理解は何所から来ているのか、背後に何があるのか、と問われるままに、私は滝沢先生のこと、先生が禅哲学の伝統にある西田哲学から出発し、バルト神学に出会い、ご自身のキリスト論を展開させていることを述べました。それに対して、先生方はバルトのキリスト論と滝沢先生のキリスト論（第1義と第2義のインマヌエル）とは違うと思われるので、バルトをバルトとして、滝沢を滝沢としてそれぞれ論じ、その後で何所が違うのか、2人のキリスト論を比較したらどうか、という指摘と指導をしてくださいました。私は2人のキリスト論を乱暴に混同していたのでした。これ以来、私は論文を比較的スムーズに書き上げることができました。

VI 若きバルトにおける神学の出発

神学（Theologie=theos+logos）という言葉が「神を語る」ということを意味しているように、神学の課題とはまさしく「神を語る」ことです。では、神を語るとは如何にして可能なのでしょうか。

ブルトマン（Rudolf Bultmann）は「神について」一般的命題として語ることを否定して、自分との主体的関連、実存関連において「神を」語ることの重要性を主張します。そしてそれは、「神を」語ることは「われわれを」、「われわれの実存を」語ることである、という主張に至ります（GuV. I, 26ff.）。これはまた、同時に、われわれの実存を語ることが神を語ることである、ということにもなります。しかしこのように彼が、人間の実存を語ることが神

を語ることであり、とも主張する時、それによって神は実存連関に解消されてしまっていることを意味しないでしょうか。

バルトは『神学の課題としての神の言葉』（1922）において、神を語ることが神学の必然的な課題であり、同時にまた人間にとっては不可能な課題である、ということを確認しつつ、神についてはただ神ご自身が語ることができる、という主張をします。では、この神ご自身が神を語るということは如何なることかと問うなら、イエス・キリストが神ご自身の語り、「神の言葉」である、と答えます。ここにおいて、神学の出発点が示されています。すなわち、神学の出発点は一般的命題としての神の存在でもなく、人間の実存的決断としての信仰でもなく、聖書の証人たちが示すキリストの出来事なのです。こうしてバルトは、神学の出発点は「神の言葉」としてのキリストの出来事であり、神学の課題はこれを語ることであり、という認識に立ちます。

このバルトに対して、当時の代表的神学者でありドイツ屈指の知識人であったハルナック（Adolf von Harnack）は、学問としての神学を軽蔑する者と言って批判を浴びせ、「神学者のうち学問的神学を軽蔑する人々に対する15の質問」という公開書簡を発表しました（1923）。これに対して、バルトも公開書簡で応答しました。

ハルナックによれば、信仰とは聖書の啓示に対する内的な心の体験であり、神学とはそれについての学問的な検証であって、別々のものなのです。信仰と神学は一つの次元の事柄ではない、というのです。しかしバルトは、ハルナックの意味での信仰と神学の二元論は「どうでもよい」ことだ、と言います。バルトにおいても信仰の吟味は必要であり、それが神学の一つの務めではありますが、吟味の基準は信仰の成立する起点にあるのであって、それ以外の学問的領域からではありません。すなわち、信仰は神の言葉の自己伝達によって生まれるのであり、神学もここで成立します。ですから、神学が学問であるというのは、神学がその対象である神の言葉に即応しているということ、すなわち神学の即事性（Sachlichkeit）ということでもあります。バルトの考えでは、ここに神学の独自性があるのであって、この独自性の故に神学は他の諸学問と関係を持ち得るのです。これに対してハルナックは、神学の

課題は他の学問一般と同じ課題なのであり、説教の課題はそれとは異なりキリスト者の証人としての課題である、と言うのです。こうして、神の言葉、神の啓示はハルナックにとっては学問の対象ではあり得ません。これに対して、バルトにおいては神学の課題は説教の課題と一つなのであります。

Ⅶ バルトにおけるインマヌエル

バルトも、滝沢先生の言う「インマヌエル」・「神われらと共に」が、キリスト教の教えの中心を示す言葉である、あるいは「キリスト教の教えの最も一般的な内容説明」であると言います (KD. IV/1, 2)。その意味で、バルト神学の中心は「神われらと共に」であると言えます。

バルトの『教会教義学』には太い背骨のようなものが貫いています。それは、神が人間と共にいるという神の約束・契約 (神論)、この契約を実現する外的な条件としての人間の創造 (創造論)、この契約を人間の罪にもかかわらず成就する、和解の出来事としてのイエス・キリストの歴史 (和解論) というものです。この和解の出来事に基づいて、「神われらと共に」があるのです。

この「神われらと共に」はバルトにおいては、確かに「われら」と言う限り、これを言う人間の自己表明をも、つまり人間の存在論的規定をも含んでいます。しかしこの「われら」は、これを信じ受領する者のみを意味していて神はただ神を信じる者とのみ共にいます、ということではありません。なぜなら、「神われらと共に」において何よりも先ず本質的なことは、これが神についての、神の存在と働きについての表明なのだからです。神の「われらと共に」があり、これを聞き、「然り」と答える受領者の群れが存在するのであり、その限り、たしかにこの「われら」は現実的に受領者の群れを指します。しかしながら、神の存在と働きが先行する限り、この「われら」は、その事実を未だ知らず、それゆえ知るよう呼びかけられている、広い世界に向かって開かれているのです。したがって、この「神われらと共に」の「われら」は宣教の課題として、受領者の群れの中に留まらず、世

界へと開かれているのであります。

そしてさらにバルトにおいては、この「神われらと共に」はインマヌエルの翻訳であり、インマヌエルはイエスの「名」の言い換えなのです。すなわち、イエスが「われらと共にいます神」なのです。「イエスがわれらと共にいる」ことによって、「神がわれらと共にいる」のです。

また私たちがバルトから学ぶことは、「神われらと共に」は私たちが仲間同士で、「やあやあ」と言って肩を組んで共にいるのとは質が違う、ということ。「神われらと共に」は、神の「われらのために」という出来事によって基礎づけられているのです。すなわち、イエスが「われらのための神」であり、裁きと恵みを行う方であり、キリストを通して神は人間をご自分と和解させる、のです。したがってキリストの生涯・十字架・復活という出来事が和解を実現する出来事なのです。この「われらのために」の和解の出来事に包含されて、「われらと共に」が現実のものとされます。

バルトはこのように主張することによって、イエスがインマヌエルである、と主張するのであります。滝沢先生の言い方ですれば、バルトにおいてはイエスが第1義のインマヌエルなのです。滝沢先生とバルトとを比較して言えば、滝沢先生においては人間の存在論的規定が先にあり、その規定を生きた一例がイエスである、これに対して、バルトの場合にはイエスの出来事が先にあり、それに包括されて一般的な存在論的規定がある、ということになります。滝沢先生の論理は一般から個別へというものであり、バルトの論理は個別から一般へ、であるとも言えます。

また、バルトの「イエスと共に」したがって「神と共に」という主張は、「イエスならざるものと共に」いることは「神ならざるものと共に」いるという帰結になります。これは当時のドイツにおけるヒトラーの神格化とナチス国家の宗教化への批判原理となりました。教会闘争の道標となったバルメン宣言（1934年）はバルトが起草したのですが、その第1項では、次のように言われています。「聖書においてわれわれに証しせられているイエス・キリストは、われわれが聞くべき、またわれわれが生と死において信頼し服従すべき神の唯一の御言葉である。教会がその宣教の源として、神のこの唯一

の御言葉の他に、またそれと並んで、更に他の出来事や力、現象や真理を、神の啓示として承認し得るとか、承認しなければならないとかいう誤った教えを、われわれは斥ける」。これは、信仰成立の根拠と政治的態度決定の根拠とが同一である、ということを示しているのであります。

バルトはキリスト教の教えを「インマヌエル・神われらと共に」の事実として総括しました。そして、それをイエス・キリストの名と同定しました。イエス・キリストの名はその生涯・十字架・復活の出来事を内実としています。

この出来事が示していることは、イエスは自分の罪の故に苦しみ死んだのではなく、他者のために苦しみ死んだということであり、しかも同時に、それは神ご自身の事柄であるということです。神はご自身の苦しみを苦しみ、ご自身の死を死んだということではありません。神は人間の苦しみを引き受け、人間の死を引く受けすることがお出来になったのであります。それは、神が生ける、愛において自由な神だからであります。私たちは、ここに、「神われらとともに」を支える、神の深みの次元があることを見るのであります。

Ⅷ 日本におけるバルト受容

1971年秋ドイツ留学から帰った私を最初に招聘してくれたのは、青山学院大学神学科でした。しかし学院当局と神学科との対立によって神学科は廃止され、佐竹明先生はじめ教授陣は散らされてしまい、この招聘も消えてしまいました。翌年、九州大学に助手として採用され、後に助教授、教授として教養部で宗教学を、さらに大学院比較社会文化研究科で西欧宗教思想を担当しました。それは1998年9月まで続き、同年10月ここ西南学院大学神学部招聘されて、今日に至りました。神学部との関係で言えば、九州大学助手になって間もなく、1973年から、非常勤講師として教義学、組織神学を、ドイツでの2度の客員教授期間を除いて、切れ目なく担当してきました。

バルト神学を中心に講義と研究をしてきた者にとって、日本におけるバルト受容というテーマは不可避の課題です。バルト神学受容史研究会を他の研

究者たちと作り、その成果を昨秋出版しました(『日本におけるカール・バルト…敗戦までの受容史の諸断面』, 新教出版社2009年)。最後に、これについて述べたいと思います。

(1) 戦前におけるバルト受容の問題点

バルト神学が日本に紹介され始めたのは1930年頃からです。日本では1931年に満州事変が起こり、暗いファシズムの時代に突入し始めていました。この時代において、バルト神学はキリスト教真理の独自性を強く訴えるものとして、「暗夜のともしび」(鈴木正久, 前掲書25頁)として受け取られました。また、ブルンナー(Emil Brunner)との自然神学論争は、バルトのキリスト論的な集中の故に、キリスト教の福音の純粹性をめぐる主張として理解され、多くの支持を獲得しました。

しかし他面、この年にミュンスター大学からボン大学に赴任してきたバルトの、ヒトラー政権に対する教会闘争については、ほとんど論じられることはありませんでした。バルト神学の上澄みのみが抽象的に受容された、と言わねばなりません。これを最も象徴的に示しているのが、バルト自身の1940年9月25日の手紙です。そこには、「私は8月に東京の松谷氏から手紙をもらいました。彼は私の論文等をきわめてオリジナルな仕方を選択して、それを翻訳させて欲しいと許可を求めて来たのです。しかし奇妙なことに、それらの中には、私がここ数年書いた政治に関する神学論文は何一つ含まれていないのです」と書かれています(前掲書292頁)。バルトはこれを日本にいた弟子のヘッセル(Egon Hessel) 宣教師に宛てて書いたのです。これは、バルト神学が神学的抽象として一面的に受容されたことを示す1例です。バルト神学はトータルにではなく神学的に抽象化され、政治的現実からは分離されて理解されました。その結果、「日本のバルト主義」(ジャーマニー『近代日本のプロテスタント神学』布施波雄訳, 273頁)という表示があるように、バルト神学は日本ではファシズムと何の対立もなく、並んで受容されたと言う他ありません。

(2) 滝沢先生におけるバルト受容

私は先に、滝沢先生における「インマヌエルの事実」について話しました。これは先生におけるバルト受容の内容である、とすることができます。先生はバルトに出会う前に西田哲学に出会い、西田哲学を受皿にしてバルト神学を受容したのです。

西田の言う「絶対矛盾の自己同一」は絶対者の普遍的充満を意味しました。絶対者は自己と同じではなく、そこには不可同の区別が存在しますが、同時にまたいたる所で常に絶対者は自己と不可分に、共に存在する、のです。人間にとって大切なことは、この根源的規定を認識することです。この認識は悟りとも言えます。滝沢先生はこの根源的規定をバルト神学からも読み取りました。すなわち、西田哲学の絶対矛盾的自己同一とバルト神学のインマヌエルとは同一の事態を、つまり人間存在の原点を言い表している、と理解しました。ただ、歴史の内部における、その表現の仕方、徴の在り方に違いがある、と言うのであります。

滝沢先生のこのような理解は、バルト受容という観点からは、神学的思考の逆転と言うべきものです。バルトにとっては、地上の人間イエスは徴ではなく、イエスこそインマヌエルそのものなのだからです。

しかし、滝沢先生の理論の独自性という観点から言えば、ここから宗教間対話への道が開かれた、と言えましょう。そしてこれは、キリスト教は諸宗教の一つに過ぎないという宗教の相対主義に尽きるのではなく、キリスト教は人間の存在論的規定・原点の徴としての諸宗教の一つであるという、宗教多元主義（ジョン・ヒック）の立場に近い宗教哲学への道である、とも言えましょう。

(3) 神学の射程

バルト神学を受容するとは、まずはバルト神学をバルト神学として理解することです。これはこれで容易ならざる課題です。しかしこれは決して神学を論理的に抽象化することを意味しません。ですから、神学の作業が社会的・政治的現実と不可分に結ばれているという、神学の状況関連性が理

解されねばなりません。その意味で、バルト神学は社会的現実とともにトータルに理解されねばなりません。これは私たちが、バルトの指さしている事柄を、私たちの認識においても実践においてもバルトと共有しつつ、私たちの状況において神学するということであります。

バルトは晩年に或るアジアのキリスト者に手紙を書き、次のように述べています。「私は長い人生で非常に多くのことを語ってきました。…今度はあなたがたの番です。あなたがたの新しい、(ヨーロッパとは)異なる、自分の状況において、(あなたがたの)頭や心、口や手をもって、キリスト教神学を遂行すること、今やこれがあなたがたの課題です。これをどのようになすべきでしょうか。私はこれについて処方箋を書くことはできません。これについて適切な答えをすることは、実にあなたがたのことなのです」(Gesamtausgabe 15, 554)。

それでは、私たちの状況とは如何なるものでしょうか。それは、インマヌエル・「神われらと共に」という事実に包含されている「われら」が、この事実を受領している群れから未だ受領していない世界へ向かって開かれた「われら」であるという、宣教の課題を引き受けるということでもあります。そしてその中には、隠然として戦前から未解決のまま残っている信教の自由・宗教と国家の問題をはじめ、今日的な装いをまとった人権や平和の問題など、社会倫理の課題を神学者として引き受けるということも含まれています。

状況との関連において神学を遂行するということについて、バルトから学ぶことは、私たちが神に問い神がこれに答えるというのではなく、先ず神が問い私たちが答える、ということでもあります。世界の危機的な状況で神の助けを呼び求めるよりも先に、神が危機的状況の中におられて、神が私たちに「お前は何処にいるのか、お前はそこで何をしようとしているのか」と問うのです。その意味では、神と共にいるということが、実に危機的なのです。

このことは、神学の射程を示しています。神学は神が問い人間が答えるという意味で状況関連的であるのですから、神学はその射程を恣意的に狭めることは許されないでしょう。私たちが或る出来事や状況を課題・問題・危難

と見る前に、神がそこにすでにおられ、神が先だって見られるからには、私たちは神と共にそれらに立ち向かうということ、ここに神学の射程があるのであります。

む す び

バルト神学は複雑で難しいと言われます。確かにそういう面もあるかもしれませんが。しかし、バルト神学は中心において単純、端的だ、と言えらると思ひます。それは幼子が大人の冷やかしに対して、「だってこれは僕のママだもん」と言う単純さと似ています。

また、バルト神学はもう古いと言われます。ではしかし、神学の新しさとは何でしょうか。神学が新しい問題・テーマを扱えば、新しい神学である、というのではないと思ひます。神学の質が問われなくてはなりません。新しい神学とは、キリストによって常に新たにされる信仰から、生まれてくるのではないのでしょうか。

それだから今、この最終講義にあたって、私はバルト神学の出口にではなく、まさしく入り口にいるのだ、という思ひを強くさせられるのであります。